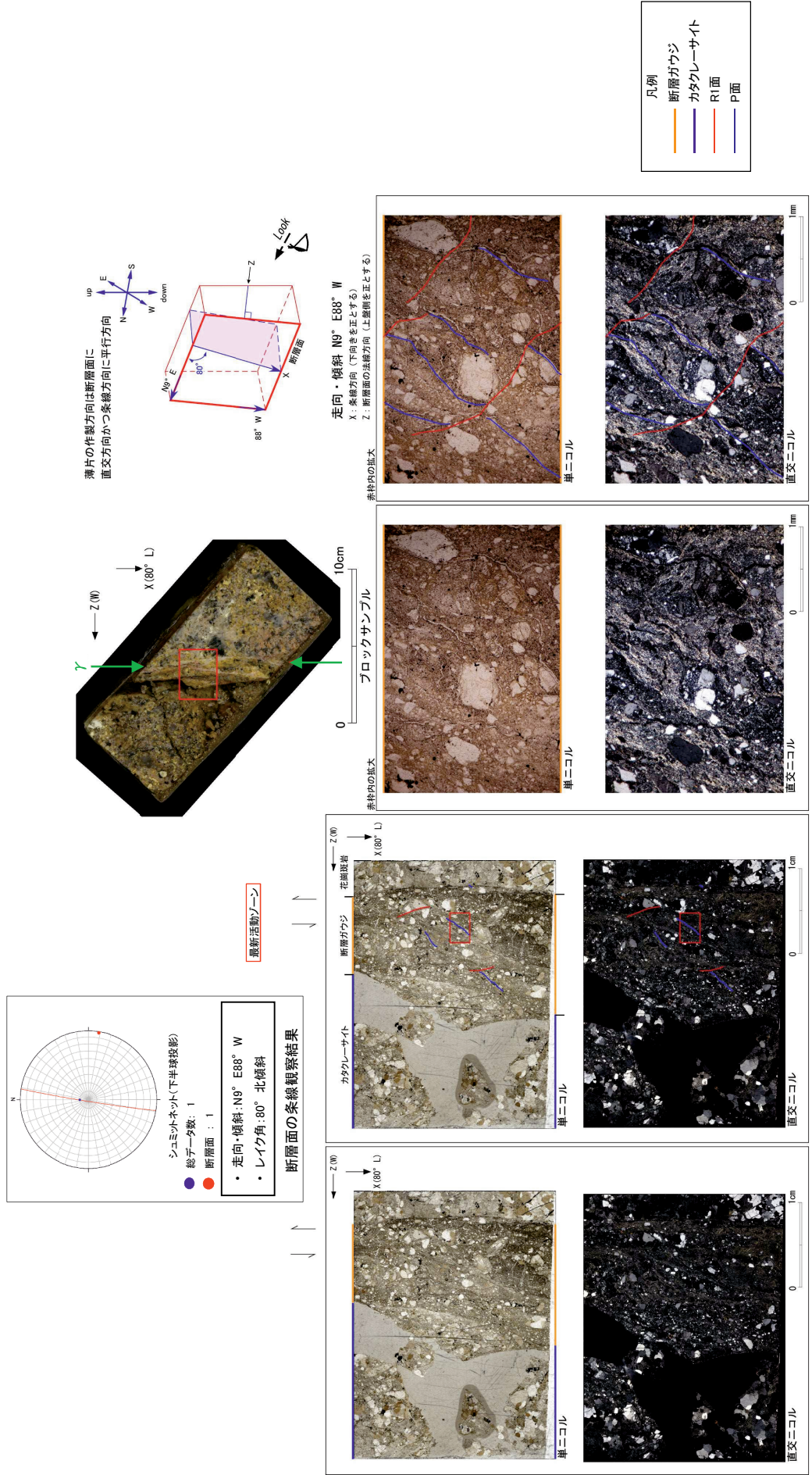


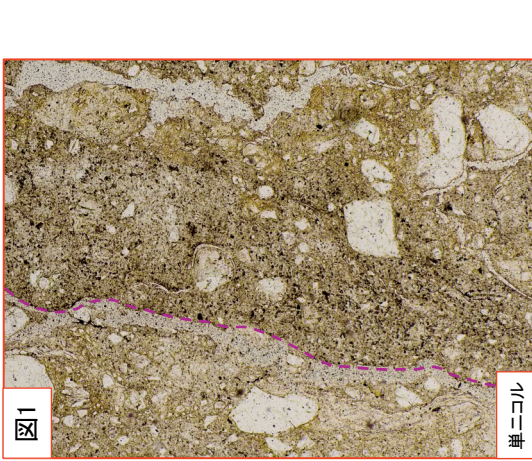
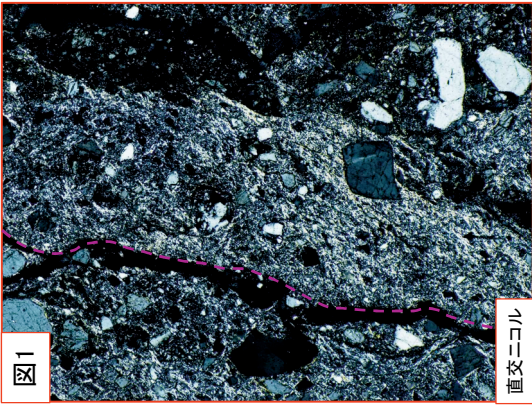
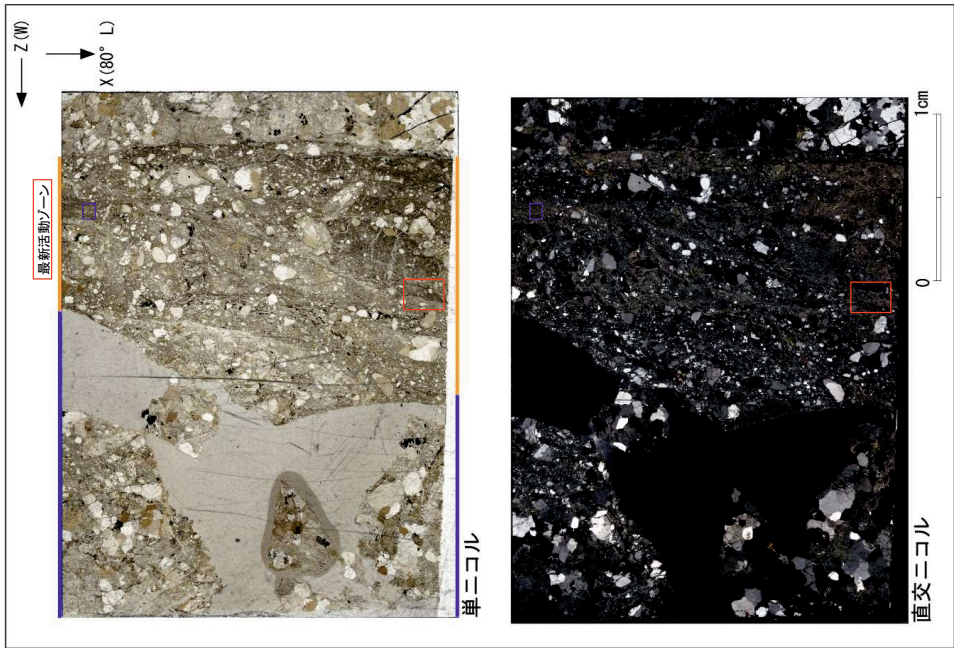
- ・H24-D1-1のボーリングコアから採取した薄片試料の観察結果によれば最新活動ゾーンの変位センスは、正断層成分が卓越する。
- ・最新活動ゾーンに以下の特徴が認められることから、断層ガウジと判断した。
 - (断層ガウジ)せん断構造に伴う粘土鉱物の定向配列が認められる。
 - (断層ガウジ)基質は粘土鉱物を主体とする。
 - (断層ガウジ)粘土状部の分布は帯状で直線的である。
 - 岩片は少ない。
 - (断層ガウジ)丸みを帯びている岩片が多い。

※断層面 γ は最新活動面

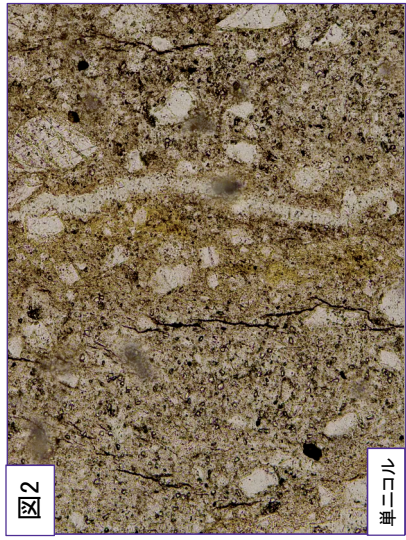
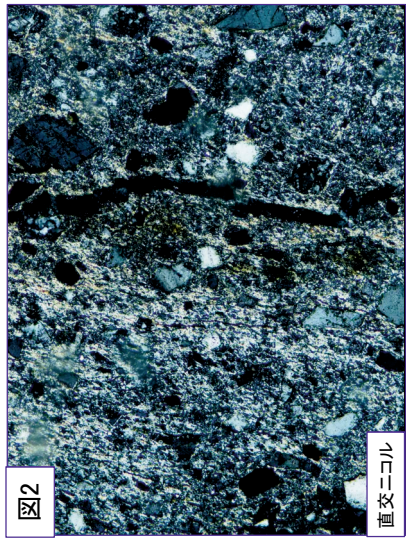


第7.4.4.252図 (3) 破砕部性状 H24-D1-1 深度60.12~60.15m (変位センス, 薄片観察による断層岩区分(1/3))

・最新活動ゾーンには、以下の特徴が認められる。
 ➢ 基質は粘土鉱物を主体とする。(図2)
 ➢ 粘土状部の分布は帯状で直線的である。(図1)
 ➢ 岩片は少ない。(図2)
 ➢ 丸みを帯びている岩片が多い。(図2)

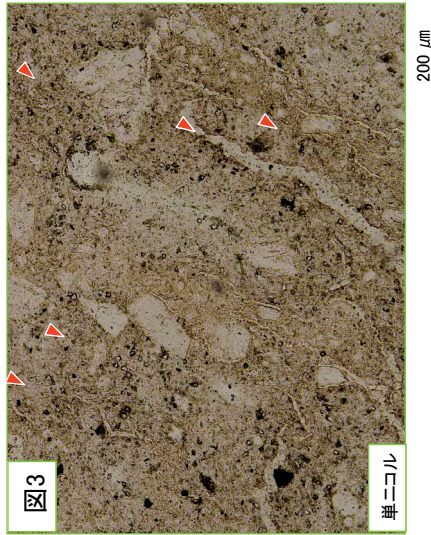
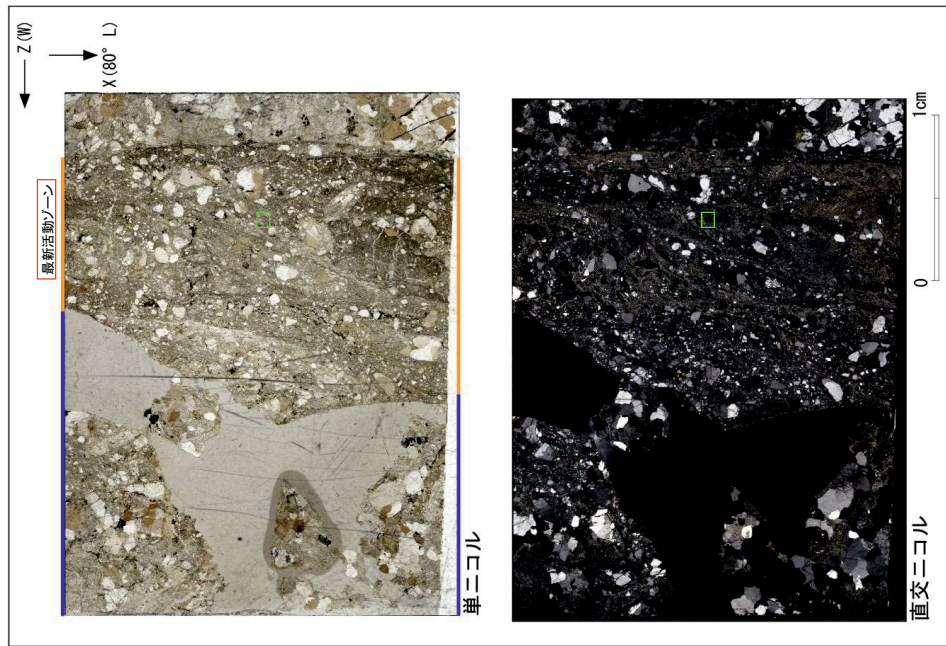


破線は帯状で直線的な粘土状部の
 範囲を示す

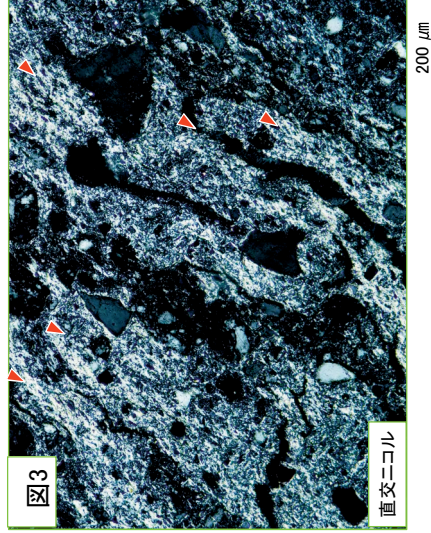


凡例
 断層ガウジ
 カタクレーサイト

・最新活動ゾーンには、以下の特徴が認められる。
 ➤ せん断構造に伴う粘土鉱物の定向配列が認められる。(図3)



赤三角の方向は粘土鉱物の配列方向を示す



第7.4.4.252図 (5)

破砕部性状 H24-D1-1 深度60.12~60.15m (変位センス, 薄片観察による断層岩区分(3/3))

(肉眼観察結果 深度60.15m)

- ・ 肉眼観察では、深度60.15mに幅1mmの明赤灰色粘土を挟在しており、幅が狭いため、原岩組織が認められる岩片を主体とし基質も細粒化した岩片からなる組織の有無は判断できなかったが、軟質で、細粒部の一部は連続性及び直線性が良いことから、断層ガウジとして扱うこととした。

(観察位置)

- ・ 薄片試料は、肉眼観察により認定した断層面 γ に沿って最も細粒化した部分を含み、人為的な試料の乱れの無い部分で作製した。

※断層面 γ は最新活動面

(薄片観察結果)

- ・ 薄片観察では、以下の通り断層ガウジの特徴が認められた。
 - ・ せん断構造に伴う粘土鉱物の定向配列が認められる。
 - ・ 基質は粘土鉱物を主体とする。
 - ・ 粘土状部の分布は帯状で直線的である。
 - ・ 岩片は少ない。
 - ・ 丸みを帯びている岩片が多い。
- ・ 薄片観察では、カタクレーサイトの特徴が認められなかった。

以上より、薄片観察結果では、最新活動ゾーンの細粒部を断層ガウジであると判断した。



(総合評価)

当該破砕部については、以下の理由から断層ガウジであると評価した。

- ・ 肉眼観察で確認された幅1mmの明赤灰色粘土は、原岩組織の有無が判断できないことから、断層ガウジとして扱うこととした。
- ・ 薄片観察で確認された最新活動ゾーンの細粒部は、その特徴から断層ガウジであると判断した。

断層ガウジ・ 断層角礫の有無	断層ガウジ・ 断層角礫の幅[cm] *	明瞭なせん断構造・ 変形構造 *
有	0.2	有

* :断層岩区分の総合評価で断層ガウジ・断層角礫の有無が「有」の場合は肉眼観察結果を記載。
断層岩区分の総合評価で断層ガウジ・断層角礫の有無が「無」の場合は「-」と記載して括弧内に肉眼観察結果を記載。

第7.4.4.252図 (6) 破砕部性状 H24-D1-1 深度60.12~60.15m (断層岩区分の総合評価)

・ボーリング柱状図では、粘土混じり岩片状を示す深度68.84～69.00mを破砕部範囲としていたが、コア写真及びコア観察で、深度69.00m以深、深度69.20mまで、同様の粘土混じり岩片状及び複数の灰白～灰赤色の粘土脈が認められることから、破砕部範囲を再検討する必要があると判断した。

・内部構造を詳細に観察するために、深度68.84～69.00mの破砕部及びその下区間のCT撮影を実施し、破砕部周辺の構造を3次的に確認した。

コア写真



凡例
 ← → 破砕部範囲※
 再検討による破砕部下端※
 ※: 写真上は白色で記載

ボーリング柱状図

●68.84～69.00m：破砕部 (HJ)
 68.84～68.93m：粘土混じり岩片状部
 上端50°で不明瞭、下端55°でやや波打って連続。径5～10mmの粘土化した岩片主体。明灰褐～灰白色を呈する。幅32mm。
 68.93～68.95m：粘土質礫状部 (Hb)
 上端55°、下端50°でともにやや波打って連続。径5～18mmの粘土化した岩片を多く含む。やや硬質。石英は殆んど含まない。上下端は幅1～4mmでマンガニ鉄染を受け灰黄褐色化。これ以外は灰白色を呈する。幅20～30mm。
 68.95～69.00m：粘土混じり岩片状部 (HJ)
 上端50°、下端45°でともにやや波打って連続。径5～10mmの粘土化した岩片主体。下端は幅2mmの硬質な淡褐色粘土脈を伴う。灰褐色を呈する。幅32～35mm。
 69.00～69.73m：大半の割れ目は消滅するが、69.42mに傾斜68°、69.67mに傾斜70°で直線的でシャープな割れ目が残留する。
 69.06～69.18m：傾斜60～80°で幅2～8mmの灰赤色粘土脈が湾曲しながら連続する。

細粒部が網目状に分布する 深度69.06m灰白色粘土の連続性・直線性が良い

深度68.93mの暗褐色の細粒部

深度68.95mの暗褐色の細粒部

深度69.10m灰赤色粘土が不連続

細粒部が網目状に分布する

細粒部が網目状に分布する

深度69.18～69.20m灰赤色粘土の直線性が乏しい

※深度69.00mを境に面構造の姿勢が大きく異なっているが、これはコア箱収納時にコアが回転したものである

青色砕部拡大

青色砕部拡大

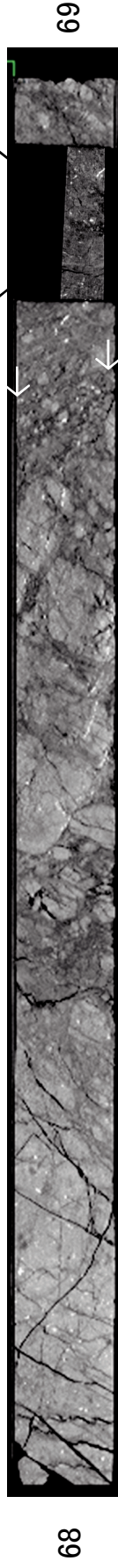


・CT画像より、深度68.84～69.00mに、垂円礫の配列や縞状のせん断面・破碎構造が認められる。

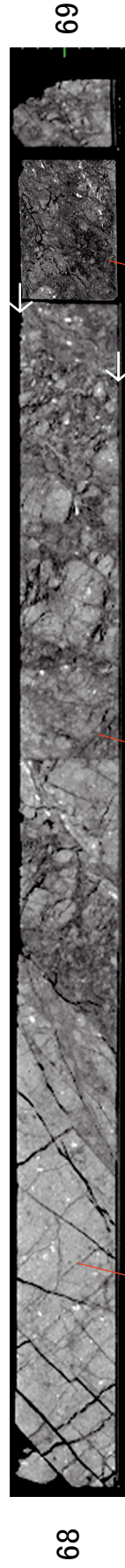
コア写真



CT画像



CT画像(側面)



深度68.84m以浅は、均質で、垂円礫の配列や縞状のせん断面・破碎構造は認められない
規則的な節理が認められる

深度68.84m～69.00mは、垂円礫の配列や縞状のせん断面・破碎構造が認められる

一部割れ目が多く、基質の密度が低い
が、垂円礫の配列や縞状のせん断面・破碎構造は認められない
一部原岩組織を残し、規則的な節理が認められる

